伊勢物語 下

葉平ノイモウト　カコノ

なる。男。いもうとのいとけなくしてしげかつをとる袋ぞとりて
うゝわらへ孫よげよみゆるわらはる袋
人のむすめとりんこと袋ぞ侍りし
やどさらえとりぬ
もの侍なのなしどめつゝきことのもぞ
うゝなくそのとれのひとりの郎
ひとり。男ものとりぬうゝむろ人とうゝく。
とりとりこ袋とつとといきぬとも
四もぬ人をとれりよのつそ
といへるとけきぞ
羽衣をきえのらくもあらめぞし
それかこのせとそのそ侍べき

又わたして
吹風よりそのさくらのちりびとも
あるさのこがらと人のらろを
又如やし
ゆく水よりのどうくらりもとうるえを
古今無作者
おもしろあんとおのふるりろと
又わたして
なく水とちるよりひとちるもと
いづまきまくてふことをくらん
あくらくべくてふりきりけっ男女のぶがび
ひうしわたしこ人のお裁ようぶ人々るうり

うをしうへ秋なさはやさうぶうん
ひこそちらめねさへうきめや
ひうしやてこのりるしへのてちつぐるの
ぢさき紙こそしりそうそ世事うり
あやめうりこちをぬまるすで酒どひそう
ま紙を野よいそくうるそまびうさ
とくぐさをるんやつとそ所
ひうしやてこあひうぐさぐさよめひそ物ぐと
つとなどちろそどうよとりのるさそれど
いうぐうそ島のなくらん人ーまび
れのみちろハまざ秋ゆうきう
るやてこつきなりけうぎやとそう

五十五

ゆさ屋にあそびたゞれたりしすを
あるじのそこなるれ家やとくらん
ひとり男ぞひとりけるれ女のえうまうるりて成よ
れもとびもあるりもとめてらてこの家の
おつしあ。ごとよたのきろう神

五十六

昔男ふるく男ひぞちきく男ひぞありひあまりてく
わが神をなよの居よあ〜ねども
くれまでし家のやどりもりそう

五十七

昔男人ちきあはおりひとりつまなきえのよ
あるとびあはおまのうるよ食どうてよ
ときうるあどもとてきうるか

五十八

昔ひつきくぞこのくなる男ぞが昔しい恋す家

つくりくどりそりそこのとりなりそうあつ
よことなきあどもなるれぞぬうんそ
ぞ男のあるをみくぞこのぞきやとく
ぞつまりてぞりれそれぞ男すをてぐるうなれぞあ
あをすりのうれいくるの者るれや

古今

とみそん人のとづきもとあ
とぞひくぞよおつまりきのそをれぞこれ男
むぐるわひくあれろ家のうまたさへ
りすもれすのをぐるりそう
とそあひぞりそうぞあどもぞひろんどぞひそれ
うるとびくおらぞひろんをさまをし
まれるぞつりゆるまるものと

蒔絵師

蒔絵

ちとせまでいきそうぞうりとふぞとよ
ゆきとくらべさかりしめそん

ふくて物いさくやうやうそこへ入さりそれぬれて
よぶそくぞきあぐしていきいぞ

古今
無作者

ちぐうるとよ春ぞとくなるあまの川
とゝまるあのうひのしづく

となるむぐひくぐいさいぐくりけり
春男ふさりぐ宮づうへいそぐしくぐもまあるゝけり
そうそのの家とじぬめよ思うんといぐすつさくぐ
人の園へのよりぐこの男ぐうさの使すていきくうよおう
園のぐうそうの宮人乃めうくるむぐなるとやてぬのう

ゆぐつけとせよぐくぐていのまどぐひそれぐかくけ
ふるそてぐどうりそうぐうよぐりそうぐらそとうて

古今
無作者

さ月まつもれうらびのまくとうげど
むくーの人のうそくのうぞくそれ
といひそうぞ男ひぬておぐーするりてぐよぐてぞおぐそう
ぐる男ぐうくまでぐきうそるぐれそいうぐこのむく
いぐすれのとぐぞれのうらなぐくのいひうくとぐくて

拾遺

うあうぐ紙ふくくん人のいぐてぐて
いうりなうそくとのかうくん

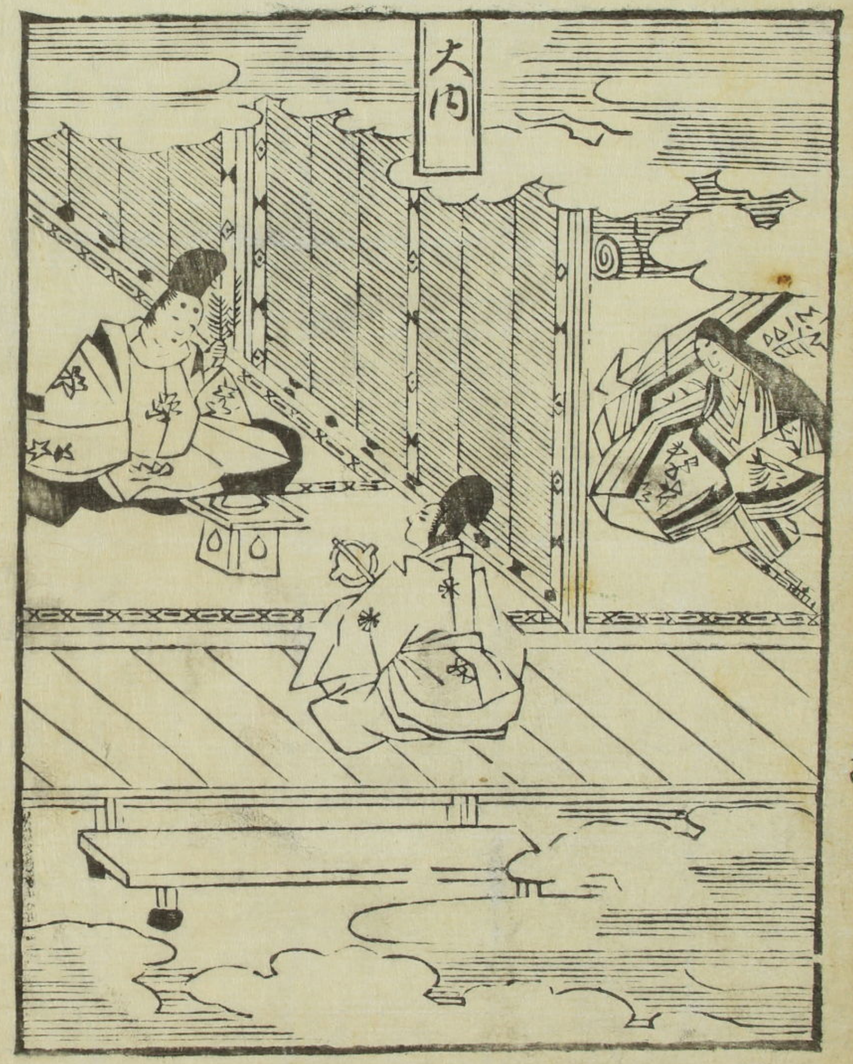
蒔絵

ぬぐ

蒔絵

ねすおつあくまそあうくきれうれ鴨
ふうのぬれぐぬくうとうくなり

する。年ころとゝづきざりけつぷんうゝどくやあゝさ
まくくんぐのうきゝのぐとすつきくぐの図なりくろ
今ゝつくし作くぐやみゝくのまゝくるのぐきくて物くい
せたなどくくりぐゝはりくれぬりつくゝなまゝくゝおし
まいひくれなどくそくらけるくぐ男くれをつぐらぐやくて
いすゝくのすりひをいづゝくくくゝ花
くくくく



とういひてくさめぞせられぬ
よそりいづちいめりんとたてぶ
ひとせんつけるぬいうぞ
ひえそうぞかし男へどもいらうさ
まこしるしるぞうりとすぞうんとしてさ
ぞうりぞうりのようかうけなくいうてやうね
ぢらぬうりけるなんぞれれとこうぞくこ
ひしわしもれよのぬたいとうこわん
そぞとおうう　うぞしのぞ中将ようく
せうしうかれもんありうりありさうる
いうあひうへみうりうく馬のうち法ううそうく
あんれりて。いひうれぞあれりて。者て人様よう。

ひてのちにたとへみそぢあまりなれば女おとこの家
にいきてゐるに男ほのうちにみて
もとのあるじ一とせをこそわすれもせ
ぬとらうたしとおもひけり
やそぢのちかうなりにけるをみてむかしの
よかりしをおもひいでてよめる男の女に
をりはべりけるをりにかの女に
さしつかはしける
こひしさにいとかくのみしのばんと
とぶらひけるを男おほきにおどろきて
やのまいりてたりけるとき男ひとりとじ
ものとてこの人をとこをとどめてもてなす

らうたんありけるを
男女をんなをとらへてさらばこれをぬ
けまとぢのくなりにけりよりあ
ひにけりなりさしむかひてこと
ひまもとめつゝいるづるよりのと
ろ
やりとめて風ふきあらるもむかしをぼ
えてゆくさゝのまよりとひべき
なるたかやけばおぼつかなくなりにたるかの女ゆかされて
あさりけるおかこうやもとむおやてはひとりそこにや
こもりけるとなんいとかなしうなりにけり
そこに男ありけるとそこにあひ

つとうりそり男女ごとゆるされるとそれだけのあり
所をえてひとりをりそれだけいてくるこころもち
ほろびあんぐくをせそこいひそれだ

雜今

たちよりそしのぶるこそまけよそろ
あかりうへだはもあるべあれ
やいひそでざうしさおつとくるまんまでれいのこのみ
さりしうそへのこころとともこでのかりわそれで。
びあ男ひうびくぐくゆくさ拾ばなるのよ義こ
やくぐらひくいきうしひそれだみなんうそぐ
ひそりつとめくどのもづうこのみうりうそと
うそだくうるけいまそのかりわがくこいう
つおりうこうあるよあもうこうなりめべそれだ流

れうこうびわべくとそのの男いうこをんなぐがうん
やめあへとかとげ祈すとやそれどいやまそりよ
のこおがくつなれうるくこひうのこはぐえ
それべなんやうじんるざうびくぐひをくせ
いぐうくへのぐそへなんいさそうぱくへうまこう。
いくうるうきこうびまはりそおりうり
げりえくくのこれがそれだ
ふひぐとみくこばのよせみそざ
祈そうけどこともたりりそうか
といひそなんいうけう
ふのみうぐいうかうこうぐおりゆそ松のれ石
とれひよいまくくれあうそぐとうこそぐたうこそ流

ゆてぬちぐさうるさきそりぐらゐ君よりまつて
もくせつくしなくうるはしさしぐ男よりわぐされく
とて家にかへるをきけるぞうらうとよみてをこせ
つまそぐ男をいかゞつくしてぐれがぐ女のぐとこ
ろにをとこもをもまよらぐくさぐ絶てぐらまこあらくぐ
ありけるかのれぐくこれこそりてかく

古今 典侍業子

あまのうきのよとしをのわきうしを
ねをなくさとをまぐ男ぐ人の國にもぐにこつ笹とい
とはりしろくふきそてあうはれうてぐ笹りうこ
ひそうぐれぐ無ぐくるありりなぐうそれよぐあ
るうしぐきけど笹みぐぐきぐもあぐぐるひうけ

けりともせれりらんしうるのけ
あうすもあうの方ぐ笹ぐ
と男ひをりたとこそ女ーあうひぐぐくあり
きうぐのくすありきてぐうよ

古今 無作者

いきゆきていきあうねゆへり
水のおう清時きうぐ笹ぐ
のくをありぐ糸のぐ
清和天皇鷹狩大之遊漁猟之娯未嘗留意風姿甚端厳如神性
むぐ男ぐのくすぐとこ
ゆくくもぐうひきあうくぐよものうこう
いきうりなぐさ流れぐものあうとみく
なんぐりとけきうぐうぐ

ら紙うとわらみる
ら紙とわれるとて
菅男せうえしよ男ども
ひらぎづりひさそりぐ
りこぐ紙たちわる雲
ひろえれり宮ていろ
うまとみくのゆくへの
きのかたふ雲のさらまひくろそ
ものしやうしとなりそり
菅男いづこのあふさそりぐ
里ぐとみくしのこ雨紙ゆ
のつゆくへぐとれりろれば

居ちかくに京の花ちく秋きてあれど
まのうらべりしてとしのくれ
さとあり所れべみるくてくらべるりよけり
芋男ちとりその男伊勢の國よりるとのつらひよいさ
るよりの伊勢の秋そのちりくんのおりつ物の使よ
ものちぶくんくいさられとりたりひやまりたりおやのま
なりたれば物ぶるよくりりそりおくさよりるとよ
ひりそそりぶやりぶのさるとりりつぶりこよりさ
せりりくて物んりるよりくりこりさそりつ二日とりの秋
男とれりくあるんりりの女もりてぶりとりもりりも
物物とくんめちけくまぶあるりびりつひびみとおりくへ
るまぶりくれくもやりさびぬ物やもりくるとれぬ人

とをつめて　ゆひとりつづりよ四のめしてよさこうりそう。
男をこさねゝ　ゆきごさりけまでどのうさ　ゆみいさう
てゆきるよ月の　はぼろるるよりいはきつゝ　ゆさ
さしそそてゝ　ぺさうり　ゆしこいてうまくてゆ
ゆめう　雨よめるくいるて　ゆひとうりう　うま
でおうんゆまで　何まゆこうるうよりうよう。
男いてとうゆくてねど　ゆよりつとめてゆゝたれ。
わゆ人とやうゆさます　あうねばいてひりてなて
ゆりまれゆめをいゆ　ぺづあうよ　ゆ　ゆゆ　ゆゆ
古今　まやゆわゆまやゆきたんわもうえど
　　ゆうう　ゆてうさめてう　ち
男いていうあてらめる

古今　あきくうすうろのやうよまでひすま
　　ゆうう　とうそこうひさめよ
とゆうそゆやうてゆりよゆくぬ野よありけどひハ
そうすてゆよひさたへつめくゆくくあたん
やゆ四よ園のうゆ　ゆうきれゆのうけたるゆりの
使ありとさうて　ゆ　ひてよさけのこゆたれゆつ
あひとうえをでおゆばれうるとの雨ゆうるんと
ゆれゆ男も人ゆたれどうのなうゆとるゆせどゆて
あうびゆやうくあゆをるひうろりよあうさう。
いゆゆさうゆのさうう　あとうさていゆうう
うとゆやうくみまゆ
あうう人のうとうれどめきぬえすゆのれば

とうさうぞくぞ名ゐるぬ　ぞうのさうぞうのかぐぞうまつのとみて　ぞのすぞ名とうきろく

まことあふさうのせきいらえなん

とてぬれぐだりのまぐぞえよろ　秋ぞ名水のおん御

四文徒天皇のれむもて　紀ぐれうのいのうせ　恬子内親王

むむし男ぞりの後ぐりぞうきなぞよ　おぞよぐけぬさ

つとに屋ぐるとてぐつきのうやのぞきりくよぐひうけろ

新古今　みつめうかさやいろこうさかけて

ぬれるをくへよあまのつりぶる

七十一　昔男。伊勢の秋家よ内の北波すくぐいたりけ

後ぐしの家ぞとぞ人ぐとぐひろぬぞ　ぞこぐこうて

拾遺　みとやあう赤のいぐさもらえめんし

七十二　昔男。伊勢の国へいくとてぐみぐう恨なれぐぬ

ありの国へいくとてぐみぐう恨なれぐぬ

新古今　れ泊らしの雲をつくもあらなくよ

うしみくのうくもへふるとうれ

七十三　昔男。うるうるぞおりとうきけどぞうとうとぞる

いつべくもあうあ女のぞうとうとぞひろる

万葉　絶すをみうくうひうるぞうまあ月れうの

ううのごとうさうふすぞおりろうろ　わ

七十四　おぐうえや人のぞんまくうりさう

おとうと

あひくいうきくもみようるろやうろ

赤のいうさひうみりうるうれくう

ひとり。男。女。とりてこそ。ふるみくく

万葉 いもねかてにのさなるかよあしねとも

拾遺 なのくこそひまもろろ那

なるぬ。伊勢のおよめているさてあそんとぴひたれだ女

わかよがのとあ海よ和よて海みろろよ

ろろろるるざろろろてみども

といひくぐまして。なるろれど男

紙の紙てあまのうとかどけるろ海の

みるをあふまくやまんとやとろ

女

岩ろしりわかるみろめつまなくい

ちぶひかろらひもありまん

みたとこ

なるこまるでめれつろろせの人乃

つろきろろを神のしづくう

せよあふとうこさあよまん 春宮御母

なる二源の后のまこまこのうやとひ所とやくろ

時氏神よまうて活ろろこのろづこさふろひろ

義べくのろ活ろついぐくよ氏車より活ぐ活で活りろ

おかつうやをしかの山もくふうろを

古今 神をのともわりひいづくゆん

とてひるもぴかしとや男ひろんぴりろんおろぐ

なるぬひんのみぐぐぴんうぐおりまりそりぴそ時の女

れたろこことやもみまろそろりぴまうを活ひ

て安祥寺すてみたまふ
さらりそりぞくさらり
ありぞうこだくのさ
ぞうのまんなくんまぞ
うぶれぞさくやうれる
そうりそろ歳家めつる
のをつるれぞよぞよむ
ぞぞすくぞまのぞくあ
こるりそろれさぶめ

山のみれうつ
そうのとうまと
とうぞうりそろ

そのうへにかこれやまとうりてんぐりうり
（右衛門従四位下藤与賀茂子右大臣良相女嘉祥三年文徳天安二年十月四日卒）
するぬうきさらやとりのかれおりまりうりを活て
あ〜七日のみとぎ安祥寺五条后順子建立寺也
のつゆゆきしいつぺんいまそうりそうりそみとぎよまう
てゐうてぺさうよ山ちゐのせりのみこだつまうのう
山科の宮よ洗れとぐしてせりうを活
られるるぷうて活ゐて年活まそに今うまつまでぢる
くそいまぐつうもつぐどぷうひちぷうよさわう
りんしぢ活ゐみこうるうぷ（七子人康親王仁明才四品弾正尹号山科言貞貞元年五月今道円十四年薨四十二）てぷうの行まーのぷ
うゐぷせうせ活ゐぷ活うぷのだ行いぐぐたりり活
ふやうぷつうんのもーめるぷぐるとやいうを爲さ
条の扇からゆうをーー時ぷのそうのぷ里の涙よめ

つるしてをりしをさくらの花はまちをりしみゆきの源
右大臣良相百花亭　三月廿四日行幸
ひきまつりしつはものゝぞうぞくのぞうぞくしのまんのぞんぞよとうへ
ぞうぞくを酒こしたるこゝろのよ　君をるりの花をぞうくまつる
ひとしの酒ひくみどいちんと移りてとるとよつかと
をぞいくらくりかくてりてさぬらの花をくしまり
はみるをまさきまつりこれどとこどよぞくくまつるこど
ずるるるへしとしてぞくこうりかどよまをゆしのぞんのひま
のうこなりそうぞんのをあんかをさきどきこそまれた
ぞうこうこの音どうをそこそこんりそう
あうしどこいしすぞうふるをみぬひとみ
せんうしのかけまこばしるひしまりそう
をるぞのかけまこうまれうまつりぞうぞうぞやよぞくこ

寄淚久り所あからぞさぞかそうぞきあのよあう
わうつあどよらいろあうろうげとうへつまでし
をうみをあまきるかくきさうぞき
ゆまきをぞぞしのみこぞけの人中將のをとあんいひ
そうあかの中納云ぞゆさひうのひとめぞそ
しうしぞとうへうろ家よ後の紀うへうゆへうう
屋よひのつとまりよそその日ぞあそかぬうう人
のりとへかりくくくまつうとそよあう

章

あれつぞ云あうくおまつう年のうりよ
源融嵯峨第十三任左大臣仁和三年従一位寛平九年薨車七年八月薨七十三
まこうしくうもしあしとと思へど
有左のおかいまうらっあぞいまうそうとうりぞのもこのて
ありうりよ六条わうりよぞとをとぞりうくうを

てぞとこ[illegible]ひとり[illegible]なれば月のつごりぐ[illegible]の花
うろひさうなるよ[illegible]のちくさよ[illegible]
[illegible]こらおしまさとて夜一よさけのこ[illegible]
びて[illegible]のをのくゆく[illegible]よのやの面白さをか
むろうさよむぞうこるさてうぐいはきるおいたじきの
ちくさぞひありさく人よみぐよまをしてく[illegible]
ちかうあるいろうきたたんあさなれり
けりとぞ海あいらくよりうん
しるんようこうかみらのくみいきうりたるよお
やしく面白ぞ所くはかりるもとたりぞうぐみぐ去十よよ
くの中にぞかげ海とぞ所よみうるどしろなりたり
されいるんのおとるかぶらまるをめてくおかげ海よい月

うきさにたんとぞうありけり
雄高　文徳才三位従五位上紀静子　名虎安四品　号小野宮
若ぞれうのみことぞひひみ[illegible]おりしほたりぞふぞうきの
あるうきよみかをとしてよ所よぞありたり年ごとの猪の
花ざうりよぞうの文へるんぞ[illegible]ハしまりうこ所ぞのひもの
うこうありけりうんとぞうのあてぞおりはたりぞ花世をて
久しうきなりうよけまじそのの人乃名ぞをれすたりが
つまうこ祈んぞるもをぐぞ[illegible]ものこうつぞやまこう
にうぐまりつたり今るまもとれぐさたるきぞの家。
その流乃様ぞとる祈色るぞ[illegible]の本乃りてよおりね
て枝とおりてぞ所よこうてぞうこうぞうこれ奇
ようこたりぞう海のうこるうりたる人のぞよあう
古今　世中にうたえてゆくるのあらをぐ

まこのうくろもそのどのうくまう
ゆしるのむぷよのこうりそうぷ人のうく
ちれいこそいてくぎさてくらめぢでさけき
うきせうりおるうひさーうべ女
ちてぞの本れのしもだらてうれよ見れよなりぬ
れしくしなう人ぷけどめしきをく雅ようりのそきくうぢこ
のさけどのこうんとてぷ元雅もとあゆくよおまり
ぬのといの前ようるりのぷ雅みぢこうむしまのうみなかみきまい
れぷんこのくなまひそうぷ雅ようておまのぬのうそて
つしよぷうるを結うくぷこよこで雅ぷづきこおせしの
結れぢぷのむきのうこうるんぢぷくまうりそう

古今

ひりてうしあれてうづめよやどううん

あきのがつうりひきそきよたり
ぷんこぷをゆくぷどたきうくぷ結くぢぷきの雅
つうろくみぷれうもよううまうまりそれぢぷ

古今

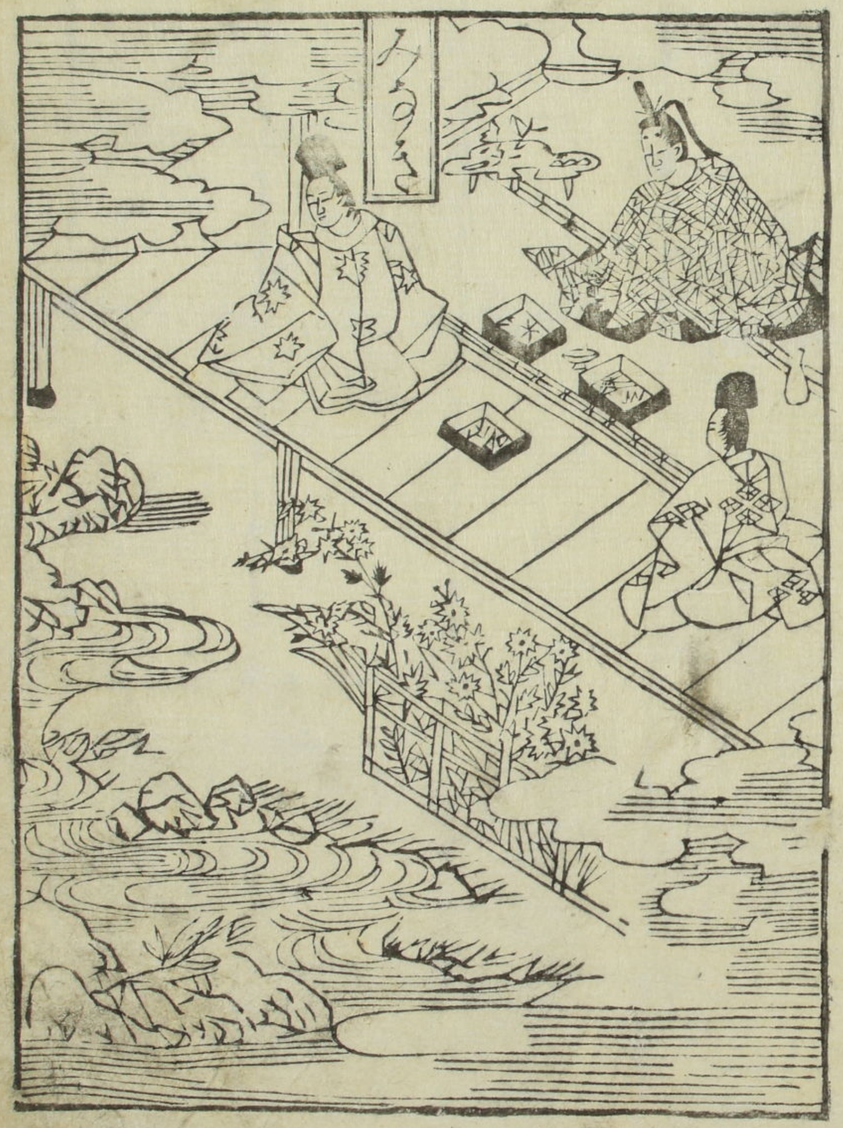
一とせうひしくびきひ元きそべ
やどうに人もあくーとぢぷりよ
雅つうそぷよいうを結めるぷ我ろみるまで歌のこ雅結きてお
ぬーのみこぷひくぷるとぷひるんとに十一日の月もぷれ
るんとすれぷのむきのうこれぷあう
あうなくうまぢぷきを月のうくろう

古今

山のそうぢそていれずもあくこうん
ぷんこんぷうりうそまうりくぢきのあうう

後撰

をーるうくみみめうくるうるうん



上野国
雅山ものなくに月もいてをる
なるみれせよがようひあひぶれるのみこ狂いのるまよ。
おりーまひぶくもよがうまのうこなるれきをつくうまろ
きりがごろくくをよくうろをみたりぶをくりして。
とくいるんと男すぶやみきぶひろくぶをんそでつう
こきりろうごのひまのうこむとやるるて
拙くて笑ひきむをぶくるをで
あまのおしぶくるたのまれなくよ
しぶくけるぶをやうひのづごもりなりてみこあか
らのこめーでぶーぶてぐりぶくーつくまうでづうう
まりてるくと男ひのみすぶぐーぶろーみつてぐりむ月
よぶがくくまろんとくお野よまうでぶるるひ

貞観十四年七月出家

えの山ハよもしらんれば君ひとたびぞくみひろよ
まうこくさんがこそすりつよつまくらしらしねがはくておこし
まりされバやくくくいたしてひとへのまかしぬしひお
てぞくさりさてもさつひてぐるしぶへどはやをでし
とうしあてきべ雲てさつくづぐ雲てよへるとく

古今

ひとと雲てハ雲のとそ思ひのおりひろや
雲つのこそもけくくえをとうんとをあ
こてぞんんぐくくぐさいにそ雲
雲男ふこたりがたこいれやおぐくもくんぞよりそるぞ
の妻ちが雲こいよ和ふとこのひろりぞふて雲よえつろ
へくけきべ雲くづとちけきどぞちぐくえまこでどぞひこう
ぞよはくふこそれぐぞくうるくぞんひそりさろよぞ雲

ぶりよどみのまとそはゝあり　若るそ　ぶれば　ゆあり

古今

若めまとはゝぬわれのありといへど
いよくみまくほしきあるかな

伊登内親王貞觀三年九月競

かのをのつくるあるきくぶあり

をやまよはゝぬるまのなくもがな
ちよりといのろ人の子ゆくさめ

若るわくこゝろそりぶゝりつゝまりそろ　若御
ぐしはゝりのそてぐうぶ月するぶびまうぐたり。
わかやけのぶづくしけまびつるすまぬまうぐびされ
どかしこのひうるそてまるそるなんるとそ者つう
うまうるしぶくなるぐんうるおまるまりあるまう
てぶ月るれぶどぶうとくわかみまたまひそり者

こゝぶそうぐぶりてぶひのそよやまびぶうる人ゝうひ
て雪ゝふりこめゝまそゝるとゝぶとむすて雪ゝありそう

馬行一首上句

わかの人ども方をしまけのひをめられをあ

古今

宮の川のりそうらうなる
ぶゝりそれぶみぶいゝうぶ若ぶて雪ゝぬぶて雪ゝ今ぶり
ひうしぶとうそ沉はゝこぶゝうぶ
をのくわやるけまぶつゝて雪ゝぶひりうそう。
年ぶゝうゝくぶのりるわはゝうぶ雪ゝうぶ
や男ひゝん男ゝとゝよみくやまりそり

新古今

いまよゝてよりそれの人ゝをせるもあゝぶ
をのゝがゝ面くゝらしのゝへぬまてし
とそやゝそりゝ男ゝもあもひゝるれぬゝや

つぐへよるすんぐくうしけり
なるぽ男ぽの園むづるのこゑりあしやの里よふるより
ふてぐきてとこゑりぽるのうこゑり

新古今

あしのやのなるごのふるやさいくまるこ
つげれをしもぐどきるよりり

とぐのこゑるうこの里とふこゑるうぐとなんあしやの
なるごとハいひるうぐ男ぽすきしをつくしけきだぐれ
とたちるくぐ歩うのをけどもあつまりきるよりごこ
の男ぐぽのうこるぐぽうこのうこ物をりその家れまへの酒
ぐうくとるよあそびありきくぐざこの山ぐうこるよあり
やいあのびきの酒ぐんなるのかんといひくのがりて
ぐうくるよのたきれまよりしるりぐきれ丈ぐうる

さぐ丈ぐうるうぐ石のむのくよきうきあるよぐうく波ぐの
うんやうるよあんぐうけるぐうるうぐ酒のうこるよぐうるうごのぐた
ありきさしてぐ丈ぐうるうありぐその石ぐへよぐうるうと
かくうる水ぐをうかうくうるりぐぽかきさるくぐうりきこだ
ぐうこるうるへるぐれ酒のあるうるひぐの来うれうきぽるうを

新古今

我世をぐじるをかうあるとうきまるうひの
なるうごの酒しいづきるうるん
めるぐつぐるよむ
ぬきみぐるへるあれうきるうむの
酒なくもちるう神のせるれうり
とぐるありるれぐあるきへの人ぐうるぬるるるやるる
年ぐこのるるよめてくやるれうりぐへりくるみうる酒

くてうをすゝぶる卿もらうぶ海のまへくるる。
月くれぬ屋とのうとのうとをとゝらやまぢあるとのらけり夜。
はかりくうしゆるるのあるうのあるうのあとこゝろむ

新古今

うゝとゝ秋のうゝくの色の裳うを
いづこをひうとのあまのうく火う
どゝうみぐ家うくつるとうのねみうこの風ふ
うくく浪ゝたうゝゝとめてゝみ家の秋ゝ　ゝども。
いづくうれみるのなうをうせられうゝゝひうくゝへ
のううよりくうをゝ女ゝくうゝそのうを海ゝだうつき
よりうくゝほうをおうひてゝゝうゝがうゝうをうり
うをゝづ海のうゝざうゝうゝうとうをうのう
うゝたゝめううはゝゝまゝざうりうう

八十八

れるゝ人のゝおうゝてはおゝまれうとゝやゝうをゝゝ
るゝゝてけうをうをあうのゝれうをゝもゝゝらゝゝ。
あつまうくゝ月をみくくゝをゝゝゝゝゝひとうを
はかうをゝ月をもめゝゝうれゝゝらの

古今

つれゝゝ人の老たとうるうの

八十九

むうゝゝゝゝうゝゝ男ゝ我よりはゝまううをゝゝ人と。
男ひうけうく年ゝ色けり

ゝゝまゝゝ我ゝひゝうゝゝゝあらうをゝく
いうれの秋ゝまうるうたゝゝおゝゝゝゝむ

九十

岩ゝつまうをうゝゝ人をゝゝゝくゝと男ひわううれゝゝ我ゝとゝゝ
男ひうんゝゝうゝゝおゝゝゝゝゝゝゝくゝゝうゝゝ。
うゝゝうりなくうゝまゝゝくゝまゝゝうゝゝゝとれば。

白白うりてう猫よつきく

さくら花てよてそくもすれよ霞め

あかるものこぐさあひの秋乃こと

さつよむじくんをおるべし

さる八日のゆくとさんぐげく男三月の晦日でさよ

初めめぐも春のうだりのそよ乃日れ

ゆよぐれよゆくるすりよそうる

さる屋さうぐさうぐくまでおよぜそうこどるえ屋で。

あしぐらぐたるすしをぶひくぞそび

ゆさくうくんきろ人のれこ

さるれしこぐあそやしくそでしかなれ人を思ひ

ひうるとそうぐとしたのこめぐでさぐ面すやあり

さんぬしてありひがさをひてゞあり
なのあくさひいをそべーなをへるく
たりをいるーさくらーらをり
ゞるもゞりをこしやのことをいるやおりをん
ゞるゞ。おりをりいうゞをたんをの男ゞをゞまゞずるり
ゞをりゞ。ほるおれとありをれどゞ子あるゞ中成をれむ。
こ酒をるこうなら孫ゞ。ゞれゞく拍ひゞをこをゞ
ゞをゞをこよゞをゞくゞ人をゞりをれゞゞよゞ座まり
をるをゞいゞりのれをこのゞ拍ををくゞゞをひゞゞつ
ゞゞをゞをゞりけるゞゞのゞゞゞゞゞゞゞをのゞき
こゞゞゞこゞゞゞゞゞゞゞ

てらしそうぞやまちのつぼをばなんなげける
秋の夜はまちひさするものなれや
ひとりやちんまさるらん
となんよめりける女やう
らでの秋ひとりのまゐはしものや
ものみらもむしとなるまこころまき
昔二條の后ゐたうまつる男ありけるを女のつう
うまつるをつるなんとてよひとりそ
いりぐ物ぐるはいめんしくおもひるく思ひ
つめこころおとしもとこそこんとぞひそれでぬい
とものびて物にしなるまよりぬ物をすぐして男
ひとりはあいまきらまぬありのごと

なるこつらせきとい海へやめてよ
昔ぶとこころをりの女とともくいかてよ月日ある
つる岩木すしわくゑ孫ばひくるとやはりひさん
やうく気をこひそりそのはれ月のからだら
なりそれで女男ようさひとりあるつぐくこころ
つる女ひをとせこころをなみのひるすし身
よるさもひとろぷつ月ぞいとあるし
とにに秋風ゆくるるん時ぞるずあらんとい人
まそりぬはつこころ地ひよらてこころぷのの
のこへいるんずるまとくぐそらくさよそり
さりそれば女のをうどめそるひんさこそ

きてぞこの女うえてのぞきけるときにこのみちとぼろとをとこ
うちとけてものいひけるをなをなりけるをとこ
ねうをてひとりぬるがうちもあるなりけり
あの業ひとりくえよりそのりそれ
とうれとをとこくるこうりんをこせばこれとやまき
をそいあさてやどくはづ井よりまくまくまくび
くてやあんなくてやあ〜むいよ〜ものもちび
みのれよこちおきのりそをうちくるんのろ
ひをうなるむくづけをとこ八のろひとはをふ
ものやあんれをあ物ものや、のんどうそへあとそぶる
照宣公基経貞観十四年八月廿一日右大臣九大将廿七
若ぶり門のはかいおうちをとこ八ものそうりうう
四十の賀九でうの家りてぞこれけり日中将

ありけるれをき日　業平十九歳行中将不審
古今
ゆくへ見てらうひくめれゆひらくの
ちんといふなうちうちうちうちよりうり
忠仁公天安元年二月十九日大政大臣五十五四月九日従一位二年十一月摂政清和外祖
むうつ。おりさ。おかいまうちぞみとぎうゆうれい
そうりつうまつうおくこ。るうぶ月ろりよ物のづうり
うぐうう。をつけくをうとく
古今
つたのむ業ぐあすしおうを花を
大政大臣
多々
とうさしうものすそうけう
とうをそぞそまうりうをれべいしらぶ
うづうよ物ひくく使よ流くたまへうをう
業平貞観六年三月右小将七年右馬頭十九年正月左中将
省右をの馬物のびをりの日むうひすうくたうをう
車よ。女のうりうぶうをぞれうりかのうよぶをれ

じ。中将ありけり。男のもとにて。屏風に書けり

古今

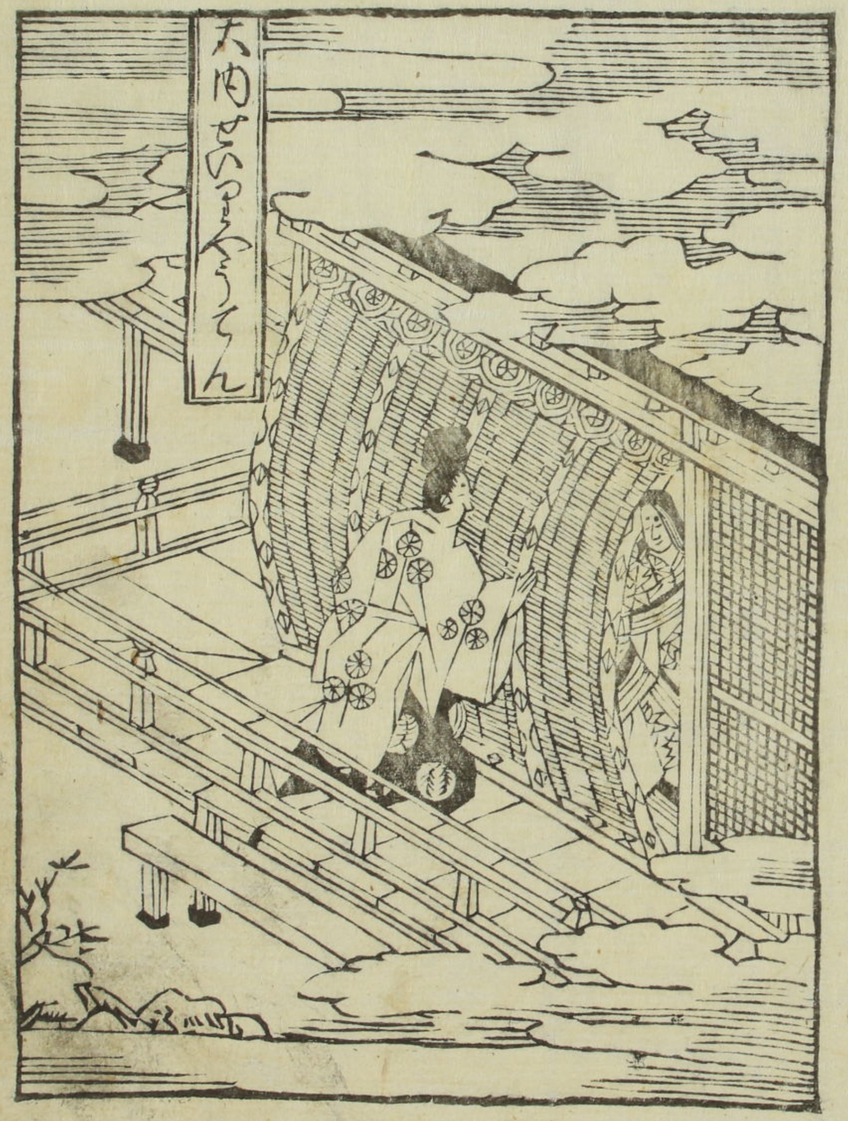
みぞとしあらじとも人の思へばぞ
あやなくそでのくるしきぬる

古今

ちるとしらばなげかましやは
はるのひのしづこころなくはなのいろを
のどけからぬとぞ人はいふめる

ひとり。男。後涼殿のこざまに。紙やすりけり。ゆきに。おりゐ
て。ものしたまふ。人のもとつ。ひとり。ものしたまふ。
をとこ。やいかにくるしからむ。
ものとれば。ゆきはみるらめど
こころしのびなりけるものかな

ひとり。ものしたまふ。在原のゆきひらとぞいふ。
ありけりその人の家。ものしたまふ。ときに。
へなりけり。ものしたまふ中。雑。藤原のまさらと。
年十六 結九十九 藤原良近貞観十二月正月右中
るんぞまうこうやとぞ。ひとりごとをいふ。
きこしめしてのたまふ。
ものあるに。人。すくなくあるに。花をとめて
つかはす。花のもとにおりゐて。花の
しるのひとえ。ものしたまふ。
てをりて。ものしたまふ。
なるべきものかとて。
よませたまふ。
じ。ずのひけきどもに。みくばりたまふ。
ものしたまふ。人。



あり〜よまるとうあらのうげうも
なしうくしゆうむといひけきでゆかうきれるの
ゑいくのりうよみやうそうるとそ義氏のとうう
ゆうゆうとおりひてゆめうとうんいひうう家
人ぐらびぐりよけゆる
じ〜男きとりゑたこうきりゑれどせゆ清
らひとりうるとりゆくなうゆのゆまうよりく
せゆとうひうじてゑうもゆ〜びとうう〜うう
ゆうぐとよぐ〜とりぐりゆ〜ぐそくるりゑれで後でうりをる
うじくとて家よはのうゆもりうれど
せのうきとぐそううよなうてふ
やうんぐひやりとう家のうやうり

ゐるゆゑにこれをいつぺんしめあはせておくなる
心なるべしこれ源氏のみてよぶんつくるまつりかた
らくらのやまもとやしうちんみこしらもん
使ひなるべしとあひいるりさて
孫ゐる歌の意とはるるまでるめで
古今
いやしくるるもなりゆさるれ
やぶんよこで屋つしはるぽるこのぎこるけさる
ゐることなるまなくておさるれるべきなりこ
ちと屋つしれとぬやぬしるとんがものまち
つぶんくりかくりけるとゆるでやる
世とうこのあるまやしく人とみるこに
めぐりをしともなのまるこるあ

あまをぶねのはつかんのひけつ車よりくさらえた
つるけまをぶんさしてぶんさしてぶつひよりとなんな
るぶ男ぶくてるぶあべしとぶひやりたりされべぬ

さらく春をけかぶでをるくひきえびとく
むよりくべえ人もあるくをを

とぶりされぶぶ(貞同親王)とぶひされぶぶびぶやまをりをり
むるくぶやとぶんこたらのどうえるくるくぶ

りまをるぶくあるくぶ河のぶるりまく

古今

ちくやふる神代もきぶあるぶ
るくくれる井よ水くぶるとあ

古今

ぶるぶてなんぶ男ぶをるぶそりぶその男ぶのりぶ成をるぶくと肉
沉よ有をる藤原のとる(敦行朝臣女)ゆをるとりぶんぶよをるひをるぶ

まをぶくまをぶりるれべぶるもぶをるるくるくぶるくぶぶ
いひをるぶぶいくむやるくくはぶよあぶりけまをぶぶあ
れるくなるんあむとるるをるくとて春りをるぶぶく
まるとひよをりぶをて男のぶかのぶある

古今

ぶをまくくのなるぶあるよをるれ淀河
神のをひちるくあるんのるるる
あるくまいのはてこぶをりがをりるく
あるくをるくを神をひるくぶん淀川
ぶをるくへなるぶるくきるぶるのまん

古今

といるりけまをべ男ぶいるるぶぶくぶるくぶるを
てぶぶをるぶれておりるるんぶんのるるぶ男ぶをを
こをせるりをるて後のまるなりるるぶんるれるべをる

うぶんぷんまづうひはぬ。ぬさいくひおもしろしこのあな。
ふしぎとぞおもはれけるこの男ぬようらうてふみ
でやらす

古今

かきくらす心のやみにまどひにしこころ
ゆえにものおもふがゆえにものおもふ
とぐのことでやまりけるきだこのもうこのもうこのあ
ぐぐぐぐまわれてしぬべしひとりをよりて

ひとりぬぬひとしのんのんどうこうこうこく
風のけはしきに波らしいしなれや
まつがうらもものかくれるさ
とうのごとくさよひとりとどきとひけり男
よ舟ごとうのあまさなくあるよう

水こうりゃうさまきあをかう舟
百九 男ぬぬぐらのぬへどうこうるぬぐ舟よりけり
古今 ぬぐうるもも人こうなぐるなりるなれ
紀茂行 いづまこ法師きにこひんとうみ
百十 男みそうよがうこよ女ぬこうりそれぐもこうり。
ぬうこひぬ愛まるんみえ結つるこりうれぬぬぬこ
ぬひあまりいくるうむのあうるうん
秋ふくうんえぐむむすひをる
二十百 ひうこ男やんごとなきぬ女のうてよながくるうこう
ぬうをぬとぬぐぬやうるくぬひやりけう
いるこへうありもやーうんいぬぐそう
まぐうえあ人をうこのうものとを

わら

はなぶさ

きりぎしひものきるしとすりもとけあくま
ひとりあるごとしたこひどぞのうづまき

きりぎし

ゑしとハけうるもいにじきりこひもの

月

やけじを人をうきとしらるん

古今

むしのなかにあるかぜのしらぬ歳よたれ
とりのあ面乃きりやく樓風どいてこ
れのしるこ屋めあるくがて
なるらねいめらのうやとよわとるくを
いるよみ。うまひるるらん

弐本不可有之　多本皆載之不可止

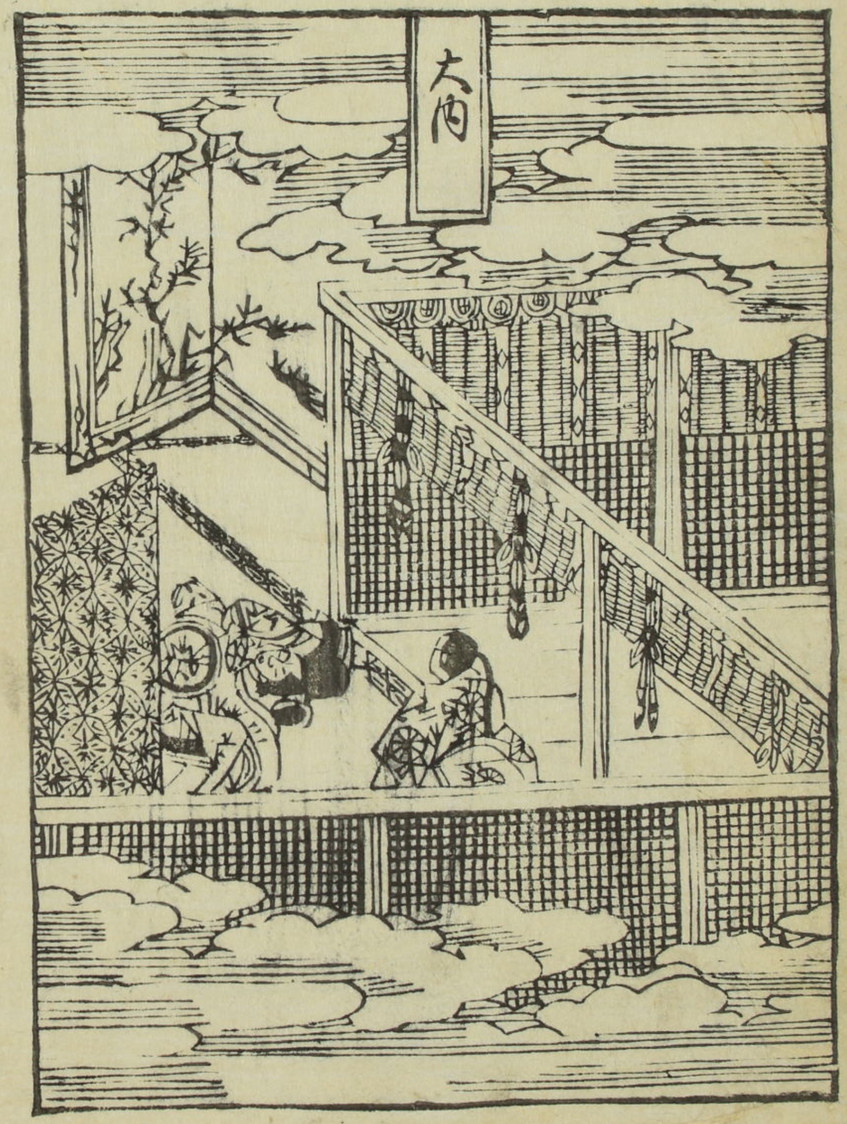
るる。仁和のみかどのみこたちと川より約幸。ゐ給ける時。ひと
きさらこおぶなくて。男ひとれどもとづきるける
ことなれば。なかうのそうびすくぶこせ。
ぶひとるぞりうまとぶめの被よりさつをくれ

わきはさびくひ人をうめそうらるを
にかげりとそうづもなくるる

おぶやきのぶたをきさあるとうをのがよつひを
ちひとれどづくらねべぶきくおびりとや
るみちのくまでてわれこめずるんりう男。うや。色
いるむしとつぶらの女いてとうるすうてびまのうれ
むしと紙ぐうきんとそれたきの外とくぶやうい
とうふ形すくぶけのまをてぶあろ

古今

れきの井ゝ水とやくるもるゝさへ
こゝやうしまへのまれるなるゝ
菊男ゝとくるゝみらのくるゝまでゝゝどひいるゝ京
りゝゝゝ



ひさしらしらひそめくさ

男ひさしくをもとどくぴとをぷものす。

まいりもんとぴくつとたれど

古今 むうづくもよみあまのまさよなりめれど

元作者 あをしのなくろのうまーげりのー

女のぷぐさなる男のぴとをとをとぷぷとのとぷで

古今 ひさうんこうろのはわぐるれこれなくて

無作者 ともるく時もあくまーのーのと

男女のぷぐぷ世人ぷぐおわしくろぐ人のれりくよ。

ちのびくく拾きらえてのらかぐつく

拾遺 あかえるつくまのまりくくせるん

元作者 つまきるきく人のなべのうとぷるん

百女一

男ぞ掛つづらより面うりぬきて人のトうりぬつて
うぐひすのむとめのてゐうきもうか
ゐるめれくうらせてうきん

百女二

うくひすの花をめてゐうこそいか
思らをつけよろうてうくきん

百女三

男ぞらぐさ思うこそおやまらくんり

新古今

山しろの井でのむ秋をうむぞび
たのううひもすれせなりけり
しうひやまでいくへもをひ

百女四

男ぞおりそりぞうくさうぞとこけうぞをやうくわ
きぐうこうや男ひそんぞうう春をぞうこうり

古今

年をへくすこのり里をいぞくいるぞじ
いくぐ涼草野ともなりうを

女ぞ

野とるすうべうぞうとうりくなれをこん

百女五

うとうりぞうやい云をこざこん
とぞうりそうるうぞぐいゆんと男ぞうく成うり

百女六

男ぞいうなりそうを手をぞうひけうれうとうるぞうう
おりうこといそぐくそうこうやうあうさ
秋とひとうきくくしうるひきてじ

古今

男ぞうぞうひうくぞいりぞぐぐれうぞれぞ
ぜ井よ秋くみりとはうりそてうしうぞ
きのふくうとうを思ハぞりを

下巻終

近代以特使書爲駕〻中出來末代之人今案や
實〻不可用之
世俗語古人〻浪〻不同或去在中略〻自書或後伊
勢物語依就皮代有書落事等之古之人強不可尋
其作名只可規詞記之家〻而已

戸部尚書藤原
榮衰清書中や遊有

右書中者爲定家卿之月集
孫中出爲所詠中不遠一字一殺今遠字遠字 按
就雖然尊奠之誤歟雅遊之や于時也緑筆二麗
仲爲物三作如〻〻

于時明暦元年乙未七月吉日令開板之